

#### 第四話

### 女たちの三角関係

「さあて、さあて、お立ち会い。いよいよ新作狂言の始まりだよお」

賑やかな三味線の音色とともに、段幕の後ろから、真つ赤なさらしを身に巻き付け、黒字に金の緞子の打ち掛けを羽織り、大きな唐傘をさし、華やかに着飾った荒牧小夜が現れると、

「待ってましたあ！」

「すてきー！」

「につぼんいちい！」

黄色い嬌声が原っぱじゅうに鳴りひびきました。

現在でいえば港区青山あたり、街外れに広がる原っぱが、小夜の大道芸の舞台です。御ひいき筋から提供された段幕が張り巡らされたなか、小夜の周囲を十重二十重に取り囲んだ女たちは、早くも興奮クライマックス、両手を振って声を張り上げます。

その日の舞台は、いつにもまして華やかでした。ふだんの小夜は、音楽の伴奏もなく、一人で歌い舞うだけでした。それだけで多くのファンを引きつけたのですが、今日は、三人の女たちが、三味線と太鼓、横笛で伴奏しています。三味線は大の得意。他の二人も夜鷹仲間で、出入りもともと常磐津の師匠をやっていて、三味線は大の得意。他の二人も夜鷹仲間で、出入りするようになった荒牧小夜に志願し、お囃子を務めることになったのです。

「これはこれは、まさに春爛漫」

小夜は唐傘を肩に掛け、花見に練り歩く風情で語り始めました。

「野にも山にも花盛り、常にもまして美しき風景と思えば、なんと……」

と小夜は客席を見回し、

「美しきご新造さま方、お嬢様方がこんなに大勢、まさに花盛りじゃのう」

と声を張り上げれば、観客たちは両手を頬にあて、真つ赤な顔で「きゃー、お嬢様方ですって！」「美しき、って小夜さまに言われちゃったー！」と、またも大騒ぎです。

すると、伴奏の調子が変わり、段幕の後ろから凛々しい武士装束の女が現れ、小夜の前を横切って去ろうとした時、ふと、立ち止まって、額に手をかざし、野山を見上げるポ

ーズ。そしてゆっくりと去っていきます。その姿に小夜、

「なんとこの美しき若侍！」

と感嘆すると客席からは、

「やだー、小夜さまあ！」

「小夜さまは、わたしたちのものよ！」

「男なんか好きにならないで！」

ブーイングに対して小夜、落ち着き払って歌い始めます。

わたくしの目の前を通り過ぎたお侍

ふと視線がぶつかって、

とてもいい風情、わたくしの好み

あなたのせいで、一日中お熱

そう、あなたこそ探し求めている男

お気に入りの服のように、

わたくしにぴったりあなた

どうやって口説こうかな

優しい声音でささやきかけようかしら

お茶でもしませんかと誘ってみようかしら

とにかくわたくしは、あなたに夢中

「だめー！」

「小夜さま、それだめー！」

客席が悲鳴に包まれる中、今度はもう一人、別のキャラクターが登場します。これが、妙に肩幅が広く、がに股歩きのおたふくのお面のように頬に真つ赤な紅をさした町娘。

こちらは小夜に眼を止め、

「あーら、わたしごのみの、男前な女」

と一目惚れの様子。またも客席から、

「なに言ってるのよ、小夜さまはみんなのものよー！」

「そうよそうよ、あんたみたいな不細工が独り占めできるわけないじゃないのー！」

「ひっこめー！」

と、ミカンの皮やらゆで卵の殻やら、物が飛んでくる始末です。

かくして狂言は、若侍を追い掛ける小夜と、小夜を追い掛ける町娘の三角関係でどたばた喜劇が進行。

若侍の行きつけの居酒屋に女中として奉公することに成功した小夜。何かと若侍に対応しようしますが、そこにやってきたのは町娘。要りもしない料理や酒を注文して、小夜を独り占めしようと奮闘。

「あー、うざいつたりや、ありやしない」

と小夜が、町娘が注文したお爛かんの徳利とくりに眠り薬を一服盛って、卓まで運びます。

町娘が、眠り薬いりとは知らず、酒を杯に注ぐのを、期待をこめて見つめる小夜。その眼差しに気づいた町娘、

「ああ、やつと想いが通じたようじゃ」

と、いきなり小夜を押し倒してしまいます。

「きゃー、小夜さまに何するのー！」

「ひっこめー！」

「ばかー！」

観客の阿鼻叫喚のなか、若侍が小夜を助けようと町娘の腕を掴んで引きはがそうとすると、町娘は小夜を押しさえつけたまま、若侍の顔面にパンチ一発。若侍、弱々しくしゃがみ込んでしまいます。

しかし小夜は、のしかかってくる町娘の股間を、膝で蹴り上げます。町娘、両手で股間を抑えて悶絶。不審に思った小夜が、町娘の裾をはげけると、

「あれー、男じゃないの！」

ここで客席大爆笑。めくれた裾すそから、布でこしらえた陽物の小道具がそそりたっていたからです。

ちようど若侍が意識を取り戻し、さきほど小夜が運んできた徳利をラッパ飲み。言うまでもなく最前小夜が一服もった徳利です。若侍、口から泡を吹いて再び転倒。

「あーれー、大変だあ！」

小夜は慌てて失神してしまった若侍を我が家に運び込み、介抱するふりして、衣服を脱がせ始めた小夜、若侍の胸元をくつろげたとたん、

「あれー、こっちは女じゃないの！」

客席、安堵とともに爆笑。

やんやの喝采を浴びながら、むくりと起きあがった若侍、演じていたのは夜鷹の八重。そして段幕の後ろから現れた町娘、演じていたのは女装した赤牛弥五衛門。  
小夜と三人並んで深々とお辞儀し、歌います。

女だろうと男だろうと、

好きになったら、おかしくなるのが恋

相手が女だろうと男だろうと、

好きになったら突っ走るのが恋

恋をしよう

熱くなろう

振られたつてもいいじゃない

命短し恋せよ乙女

「なんだ、あれは？」

やや離れた草むらから、荒牧小夜一座のオンステージを覗いていたのは、小幡伝大夫、七郎右衛門の兄弟。伝大夫が腕組みし、悲憤慷慨の態で言いました。

「当節じゃ、ああいうわけのわからん芝居が、女どもには受けるのか？」

「そのようじゃの、兄者」

と頷く七郎右衛門に、伝大夫は一喝、

「そのようじゃの、ではない。女の分際で惚れた男に薬を持って犯そうとしたり、男の癖に女装して女を犯そうとしてきんたまを蹴られたり、そんな芝居を見て、武家の奥方やお嬢様方から町人にいたるまで、大勢の女どもが喜び騒ぐとは、この大日本の国柄を滅ぼす気なのか！」

「兄者は大袈裟だのう」

と笑う七郎衛門に伝大夫、

「笑い事ではない。そもそもあの小夜という女、われらの目の前で四人の浪人者のふぐりを潰したのだ。平井によれば、一人で十六人のふぐりを潰したかもしれぬ女だ」

「分かっておる。ただ……」

七郎右衛門、笑いをおさめて首を傾げます。

「それよりも、あの町娘に女装した男、どこかで見た顔だ」

「そうか？」

「うむ。昔の部屋住仲間にああいう顔の奴がいたような……」

腕組みして記憶を掘り起こそうとする七郎右衛門に、伝太夫は言いました。

「旗本だったか？」

「おそらく……」

「もしそうだとすると、部屋住とはいえれつきとした旗本が、白粉塗って女装して芝居に出るなど、ますます、けしからんな。いずれにせよ、正体を突き止めてやろう」

その日の昼下がり。

「お疲れ様あ」

夜鷹長屋のいちばん奥まった八重の住む一間で、荒牧小夜、八重、そして弥五衛門は祝杯を挙げました。三味線を鳴らしたお葉をはじめ、手伝ってくれた夜鷹たちには、別の間で酒肴が振る舞われています。

「これが今日の売り上げだよ」

荒牧小夜は、風呂敷を拡げて包んであった売り上げ金を三等分し、二人に手渡しながら、

「公演を開くたびに来場者も売り上げも増える一方、ほんと、皆さんのおかげよ」

と頭を下げ、それから自分の取り分から一部を八重に手渡し、

「これは、夜鷹の皆さんに、わたくしからの寸志だからって配ってちょうだい」

と言うと、女装のままの弥五衛門も慌てて、

「これはあたしから」

と提供します。最初は固持した八重でしたが、やがて涙を拭い、

「こうやって、小夜さんの公演を手伝うという名目で、あたいたち夜鷹のために助けていただいて、本当にありがたいと思ってるよ」

と頭を下げました。小夜は手を振り、

「とんでもない。助かっているのはわたくしの方。お葉さんたちのお囃子のおかげで、ずいぶん盛りあがるようになったわ。何より、弥五衛門さん、八重さん、お二人の演技は、本当に上達した。だから今日みたいに脚本にいろいろと工夫を盛り込めるようになったの」

「あたいはともかく、弥五さん、上手だよねえ」

と八重に言われた弥五衛門、

「弥五さんだなんてやめて。女の恰好をしてる時は、弥生やよひって呼ぶって約束でしょ」

「ああ、そうだった。弥生ちゃん、ごめんごめん」

八重は頭をかいて謝り、一同笑いさざめきました。

その時、近くの寺で鐘を撞く音が響きました。

「あら、いけない」

弥五衛門は立ち上がりました。

「今夜は、母上と一緒に、死んだ父の朋輩を訪ねる約束があつたんだった。急いで帰らな  
きゃ」

「あら、そうなの？ 残念ね」

「また、ゆつくり呑もー！」

弥五衛門は急ぎ、武士装束しよくぞうに着替え、路地の井戸で化粧を落とし、髪を結び直して急いで出て行きました。

それを、木戸の陰で見送っていたのは、小幡兄弟です。急ぎ足で歩く弥五衛門の後ろから、足音を忍ばせて後を尾けはじめました。

「それにしても……」

伝太夫が小声で弟にささやきました。

「まさか、あの赤牛弥五衛門だったとは」

「ああ、あの豪勇を歌われた男がな。やはり、浪人になって生活が苦しいと、ああいう趣味に走ってしまうものなのかな」

その数刻後。

渋谷川にほど近い船宿、ここは町奉行の意を受けた平井権人や小幡兄弟が、芝新網町しばしんあみまちの夜鷹肃清計画の根拠地として借り受けたところです。

二階の座敷で、赤牛の件につき小幡兄弟の調べを聞いた平井は問いました。

「その赤牛と申す浪人は、かなりの使い手なのですか？」

「ああ、そうだ」

伝太夫が答えます。

「柳生の道場で、師範代をつとめたほどの腕前だ」

「なるほど……」

平井は、腕組みして思案顔。

「となれば、敵に回したくはありませんな。できれば、こちらの味方につけたい」

ふと何かを思い付いたように、平井は言いました。

「ここは、町奉行殿に、ご出馬願えませんか」

さて、その数日後の朝。

夜の夜鷹の用心棒役を務めおえた赤牛弥五衛門、武士の装束で住処である長屋に帰り、

「母上、ただいま帰宅いたしました」

と挨拶しながら部屋に入ると、

「弥五衛門、そこに坐りなさい」

低い声で言いつけたのは、弥五衛門の母、春枝。その険しい面差しに、一瞬立ちすくんだ弥五衛門でしたが、

「はい、母上」

と袴の裾を払い、向かい合って正座しました。その弥五衛門をしばらく凝視していた春枝は、一瞬うつむいた後、きつと顔を上げ、

「昨夜のお仕事は、無事におつとめなさったのか？」

と静かに問いました。その静かな声音に、弥五衛門はかえってぎよつとしました。

まさか……。辻斬りが横行しているので自警団に雇われているという嘘がばれたのだから。

動悸を抑えきれぬまま、

「ええ、無事につとめました」

と答える声もかすれておりました。春枝はさらに問います。

「昨夜はどこで、おつとめなさっていたのかえ？」

「あ……それが……ええと……」

「言えぬのですか！」

びしやりと言われて肩をすぼめる弥五衛門を、春枝は厳しく問い詰めます。

「ついさっきまで働いていた場所を、おっしゃれぬはずがない。さては弥五衛門どの、この母に嘘をついてらしたのか？」

母親よりも跡取り息子のほうが格上とされた封建時代の風習に従って敬語を使いつつも、春枝は今にも弥五衛門につかみかからんばかりの面差しで叫びました。

「白状なさい！ 昨夜はどこに行かれておった？ この母を騙そうなどと、ゆめ思われるな！」

「だ、騙すなどと、母上……」

弥五衛門は必至で抗弁しました。

「いつもどおり、自警団のお手伝いをしておりました」

「だから、どこでお手伝いをなさったのですか？」

「芝新網町でございます……」

「芝新網町ですね。その自警団は、どなたを守っておるのです？」

「それは、道行く人を……」

「嘘おっしゃい！」

春枝は金切り声を張り上げました。

「これ以上、嘘の上塗りは結構です。あなたが毎夜、賤しい女たちの恰好をして、恥知らずにも夜の街をうろついているのを、見た方がいるのです！」

そう言いながら、春枝は大きな風呂敷包みを突きつけました。弥五衛門が天井裏に隠しておいた女装用の着物です。

「……………」

言い返す言葉がありませんでした。袴の膝を挿んで俯いておりますと、春枝は、箆筒を開け、白装束と白鞆の短刀を取り出し、弥五衛門の前に置きました。

切腹せよ、との意です。

真っ青になって狼狽える弥五衛門を尻目に、春枝がさらに薙刀を取り出し、鞆を払って息子の背後に立ち、静かに言いました。

「もはや、赤牛家はおしまいです。母が介錯して差し上げます故、みごと、武士らしい最期をお遂げなさい」

「そ、そんな……」

「死ぬのが恐ろしいのですか！」

「いえ……しかし……」

「ああ、嘆かわしや」

春枝は眼をつぶり、懐の短刀を抜いて己が喉に擬しました。

「武士の子ともあるうものが、口にするのも憚られる恥を人に知られて、腹ひとつ切れぬとは。この母が手本を見せる故、弥五衛門どのは必ず後を追うのですよ」

「おやめください、母上！」

弥五衛門は床に突っ伏して、額を畳にこすりつけました。

「わかりました。もう致しません。心を入れ替え、武士として腕を磨き、仕官の道を探します。ですから母上、そのような事はなさらなくてください」

「いえ、腹を痛めた我が子がそのような変態だと知った上は、これ以上生きながらえてはおられません。お放しなさい！」

短刀をめぐって母子でもみ合ううちに、

「御免」

と、障子戸を叩く音がしましたが、死ぬの死なぬのと大騒ぎする母子の耳には入りません。

「失礼しますぞ」

と戸を開いて入ってきたのは三人の武士。

「あ、赤牛殿、何をなさっておられる？」

「早まってはなりませんぞ！」

と母子の間に割って入ったのは、小幡伝太夫、七郎右衛門の兄弟。

そして、その背後に、深編笠で顔を覆った武士が静かに立っておりまして。

言うまでもなく、春枝に弥五衛門の女装癖を告げたのは、小幡兄弟です。何故そのような行動に出たかというと、芝新網町の夜鷹肃清計画の一環なのですが、それはおいおい説明するとしましょう。

昂奮して、死ぬ死ぬ死ぬと叫ぶ春枝をなんとか宥めた小幡兄弟、

「ご母堂のお気持ちは分かりますが、とはいえ赤牛弥五衛門どの、死なすには惜しい人材でございます」

と兄の伝兵衛が言えば、弟の七郎右衛門も口を添えます。

「拙者、赤牛どのとは以前、親しくさせていただいた事がありました。仲間うちでも飛び抜けた剣客であったことは、忘れたことはいません。ここは一つ、生まれ変わるという赤牛どのの誓いを信じていただけませんか。われらも赤牛どのの再出発をご支援させていただきます」

「とはいえ……」

春枝はさめざめと涙を流して言いました。

「わたくしが、内職で稼いだお金を積み立てて、つてを頼ってほうぼうを回っている間、この馬鹿息子は、女の着物を着て白粉を塗り、賤しい女どもと遊んでおったのでしょ」

母の涙に、弥五衛門は身をすくめて恐縮するばかりです。春枝は続けました。

「こんな出来損ないを仕官させてくださるような、有難いお方が、果たしてこの世に、いらつしやるでしょうか」

「おりますとも」

伝太夫は言いました。

「実は、赤牛どのに、ぜひお願いしたいことがあります。江戸の治安風紀に、ひいては公儀の行く末にもかかわる重要な件です」

「え……?」

江戸の治安風紀だの、ご公儀の行く末だの、大仰な物言いに赤牛母子、並んで正座したまま、ぼかんと小幡兄弟を見つめるばかりでした。

「しかも、この案件の元締め役となっておられるのは、さる要職にある御仁。ここで手柄を立てれば、千石取り、いな二千石の旗本に跡取りとして斡旋してもよいとおっしゃっておられる。この機会を逃す手はございませんぞ」

「に、二千石ですか……」

弥五衛門は唾を呑み込みました。春枝は口を開けたまま硬直しております。

「そして、その元締め役の方は、今日ここにいらしておわします」

戸口の方を顧みた小幡兄弟、その眼差しに答えるように、じっと佇んでいた武士は深編笠をとって、畳の間にあがり、裾を払って坐りました。

「われらが兄、小幡越後守です」

と伝太夫に紹介され、春枝も弥五衛門も、あっと眼を見開きました。

「ま、まさか」

「お、お奉行様！」

深々と土下座した赤牛母子でありました。

数日後。

すでに、西の空があかい夕焼けに染められ始めた時刻です。

「こんにちは」

夜鷹長屋の木戸をくぐって現れたのは荒牧小夜でした。

「あー、小夜さまあ」

「いらつしやーい!!」

出勤間近とあって身支度を始めている夜鷹たちの黄色い声に迎えられ、小夜は笑顔で挨拶をかわしながら、八重の部屋へと向かいました。

「わたくしよ」

そう言いながら戸障子に手をかけると、中からがらりと開き、八重が満面の笑みを浮かべて顔を出しました。

「表の騒ぎを聞けば、小夜さんが来たってすぐ分かるさ」

「これ、お土産」

畳に座りながら、小夜は風呂敷に包んだ木箱を置きました。木蓋に「長崎屋」と焼き印が押してあります。

「なあに？」

八重が問うと、小夜は眼を細め、

「長崎名物かすていらという珍しいお菓子。甘くておいしいわよ」

言われて木蓋を開け、香ばしい匂いに顔をくしゃっとさせて笑う八重に、

「皆さんで分けてね」

と小夜は言い、八重は「わかった。明日の朝ご飯にしよう」と蓋を閉め、

「いつも、ありがとうね」

と頭を下げました。小夜は首を振り、

「どうせ貰い物だから」

と俯きます。八重は察し顔に「蜂須賀の奥方さまから？」と問いました。小夜は頷き、

「そういうこと」と自嘲気味に笑いました。

「恥じることはないよ」

八重は、明るく小夜の肩を叩きました。

「お大名の奥方さまのところに入入りできるだけ、小夜さんの芸がすばらしいって事なんだから」

「ありがとう」

小夜は寂しげに言いました。

「分かってるんだけど……なんだか最近、気分が晴れなくて」

そういう小夜に、八重ははっと気づきました。

頻繁に網浜新町をうろついていた母衣菊乃が、あの夜、八重が小夜の頬に接吻したのを見て以来、ちっとも姿を見せないのです。唇を噛みしめ、両手を握りしめ、小夜と八重が

抱擁しあっているのを見ていた菊乃の面差しが、八重の脳裡のうりに蘇よみがえりました。

やっぱり、あれ以来、小夜さんは菊乃さんに会ってないんだ。

それが、寂しいんだ。

そう思ったとき、不意に八重の胸に、何やら不思議な感慨が浮かび上がったのです。

嫉妬しつと……？

あたい、嫉妬してる？

「ねえ……」

八重は、狼狽ろうばいを隠すように、明るい声音を作って問いました。

「小夜さんは、いずれ荒牧の家を再興して、武士として生きようとか、考えた事ないの？」

「まさか！」

小夜は笑いました。

「そんな望みがあったら、こんな恰好して、歌ったり踊ったりしてないわ。ここまで評判がたってしまったのだから、いまさら武士には戻れません」

「そう？」

「わたくし、じゅうぶん幸しあわせよ。こうやって、八重さんや、夜鷹の皆さん、赤牛さんと楽しくやっているのだから」

「そういえば……と小夜は問いました。

「赤牛さんがいないわね」

「さつき子供がお使いに来て、ここどころ風邪が重いので、今夜は休むって」

「それは不用心ね。わたくしが代わりに用心棒やりましょうか？」

「え、そりゃ悪いよ」

「大丈夫よ。どうせ明日は一日暇ひまなの。一度、夜鷹さんの恰好を試してみたかったし」

「そうかい。わかった。じゃ、あたいが夜鷹に化けさせてあげる」

八重は笑顔で、小夜を向かい合って坐らせました。蝶々を刺繍した派手な打ち掛けマシントを脱がせ、粗末な紬つむぎの着物の袖そでに腕を通させます。次に橙だいだいいろ色の半幅帯はんはばおひをしめさせ、いよいよ仕上げです。

一度袖を通させた紬の着物はだけさせ、いつも胸に巻いている赤いさらいをほどきました。白粉を塗るためです。

「……きれい」

八重は思わず吹き、露あらわになった小夜の上半身を見つめました。透すきとおるような白い

肌、肩から胸にかけ柔らかく肉が乗り、その下にまるいきれいな形の乳房。

好き……。

いつしか、八重は小夜の乳房の谷間に顔をうずめていました。やわらかくて、なめらかで、暖かくて、いい気持ち。

まるで、おっ母かあに抱かれてるみたい……。

「八重さん……」

頭上から声が降ってきました。見上げると、小夜の困惑した顔が、そこにありました。

「こういうの……わたくし、困る」

小夜は、面差しをそむけ、俯うつむき加減に続けました。

「知ってるでしょう。わたくしは、他に好きな方が……」

「菊乃さんでしょ」

八重は身を起こし、唇を噛みしめて言いました。

「やっぱり……小夜さんも、あたみみたいな夜鷹じゃなく、お侍の家の子しか、眼中にないわけ？」

「何を言うの！」

小夜は、ますます困惑して言いました。

「お侍だろうと、夜鷹だろうと同じ人間よ。そうじゃなくて、菊乃さんはわたくしの初恋の人なの。八重さんは、わたくしにとって大事なともだち。ふたりとも、大事な人なの」

「わかってるさ」

八重は不意に笑い出しました。

「うん。わかってるんだ。ただの気の迷いさ。小夜さんの裸がとつてもきれいなもんだから、ちよつと悪戯いたずらしてみたかっただけだよ」

さ、お化粧の続き！ と八重は白粉を取り出し、小夜の顔から首、首から肩、肩から胸にかけて塗りました。頭に白い手ぬぐいをかぶせ、夜鷹姿に仕上げたのです。

「わあ、やはり小夜さん、きれいだね。夜鷹の姿でも、すつごく艶あでやかだ」

溜息をついて見とれる八重に、小夜は照れて笑い、商売道具のゴザを受け取ると、唐人剣をなかに仕込んで巻き上げ、小脇に抱えて言いました。

「では、参りましょうか」

同じ時刻。

「ああ、もういい加減に覚悟を決めろ、母衣菊乃！」

寂れた道場の畳の上で、道着姿の菊乃は、自分で自分の頭をぼかぼかと殴りながら、大声で独り言をつぶやいておりました。

「何度言ったら分かるんだ。自分で言ったじゃないか。大名も夜鷹も同じ人間、万民を慈しむことこそが武家の役目だつて。だったら、夜鷹の用心棒くらい、引き受けたつていいじゃないか。そうすれば……」

と言いかけて口を噤み、がっくりと肩を落として、今度は小声でつぶやきます。

「小夜さんとも、もっと会えるようになるって……。でもなあ」

ぼったりと畳の上に大の字に仰向けになり、雨漏りの痕がまだらに染みついている天井にむかつて、

「八重とかいう夜鷹と小夜さんが、いちやいちやいしてるのを見るのは、いやだー！」

と叫んだ後、口をへ、の字に歪め、涙ぐみながら溜息をつきます。

「八重だけじゃない……ごひいき筋の奥方やら、姫さまやらの相手までしてお金を稼いでるんだつて、私、知ってるんだから……」

それから、両腕で自分の身をきつく抱きしめ、畳の上を転がりながら、

「ああー、せつないよお！ どうすりゃ、いいんだよー！」

とわめいた後、ふと、「そういえば……」と呟きました。

前に、薩摩武士の股間を蹴り上げた時に声をかけてきた、あの小幡とかいう旗本と、平井という浪人。町奉行の意向を受けて、芝新網町の夜鷹を守る用心棒を探っていると言っていたが、どうも怪しい。第一、二人とも目つきが悪かった。

「それも気になるなあ……」

不意に菊乃は、すつくと立ち上がりました。

「決めた！」

口を一文字に結びました。

「私、夜鷹の用心棒、やる！」

「今夜は月がきれいだね」

渋谷川のほとり。空を見上げて、八重が言いました。並んで歩く小夜が問います。

「こんな夜は、やはりお客さんも多いの？」

「そうだね。闇夜は客にとっても危ないから、明るい夜のほうが稼ぎがいいはずだよ」

「辻斬りにとっては、こういう明るい夜と闇夜と、どちらが都合がいいのかしら」

小夜は思案顔で言いました。八重は肩をすくめて微笑みました。

「どうだかねえ。でも、あたいが小夜さんに初めて会った夜は、月が明るかったね」

「ああ、あの時……」

小夜も、思いだし顔に頷きます。村木という、八重に鞆丸を一つを蹴り潰された旗本が、仲間を大勢引き連れて復讐に押し寄せた夜のことです。たまたま通りかかった小夜が助太刀し、全員の鞆丸を潰して去勢したことが、知り合うきっかけでした。

「派手にやったねえ」

「そうだったわね」

「ねえ、小夜さん」

八重が問います。

「男のきんたまを潰すって、どういう気持？」

「どういう気持って……」

小夜は、首を傾げて少し考え、やがて答えました。

「急所だから、まずそこを狙う。それだけよ？」

「それだけ？」

「ええ。わたくし、台湾で四年間、戦をやっていたでしょう。腕っ節で劣る女が男に勝つには、きんたまや目玉など急所を狙うのが鉄則だと教わったの」

「ああ、それ分かるなあ」

八重は笑い、

「あたいも同じような感じだったよ」

「え、八重さんも、戦に出たことがあるの？」

「合戦じゃないけれど、あたいが育った貧しい長屋じゃ、毎日が戦争だった。ひもじくなったら、店先から食い物をかっぱらう。かっぱらった食い物をめぐって、子供同士で戦う。男の餓鬼に負けないために、身につけたのがきんたま蹴り。あたいを女郎に売ろうとしたおっ母ああの人もきんたま蹴りでやっつけたし、今日まで生き延びてこられたのは、この技のおかげだっと思ってるよ。何よりさ……」

八重は、悪戯っぽい笑みを小夜に見せて言いました。

「大の男が、両手で股ぐら抑えて、地面に転がってわんわん泣いてる姿って、痛快じゃないか？」

「同感だわ」

二人は同時に噴き出し、笑いさざめきながら歩いておりますと、背後から足音が足音が響いてきました。ひどくせかせかしていて、振り向くと、一人の武士が、俯うつむいて地面を見つめながら、何やら呟つぶやいてやってきました。

私、夜鷹の用心棒やる。

私、夜鷹の用心棒やる。

「あれ？」

小夜が眼を見張りました。

「菊乃さん？」

私、夜鷹の用心棒やる。

私、夜鷹の用心棒やる。

そう呟きつつ、小夜と八重の姿が眼に映らないかのように、足早あしばやに通り過ぎた菊乃の背中にむかって、小夜は叫びました。

「菊乃さん、どこに行くの！」

「え」

菊乃は足を止め、そのまま硬直しました。小夜の声に反応したにもかかわらず、背を向けたまま凍こおりついたように直立しています。

「いま、夜鷹の用心棒をやる、とか言ってなかったっけ？」

そう呟いた八重に、小夜は、

「え————！！！！」

と駆け出し、菊乃の背に抱き付きました。

「菊乃さん、用心棒やってくれるの？」

「え……あ……」

小夜に背後から抱き付かれ、菊乃は、あわあわと狼狽ろうばいし、

「ちよ、ちよつと。いきなり、やめて」

と振り向いた瞬間、面差しを強こわばらせました。

菊乃の眼に、手ぬぐいを頭にかぶせ、丸めたゴザを小脇こわきに抱えた夜鷹姿の小夜が映ったのです。

その背後には、同じ装束なりをした八重が、立っているのも。(つづく)